

ジャック・ザ・リパー セラピー
 〈切り裂き魔〉的外科療法 vs. 未来派療法

エニフ・アンジョリーニ・ロバート Enif Angiolini Robert (1886-1976) 著

『女の腹部 — フィリッポ・トンマーズ・マリネッティ共作外科小説 UN VENTRE DI
アブドローメン サージカル・ロマンス

DONNA: romanzo chirurgico con Filippo Tommaso Marinetti』 (Facchi, Milano 1919) 邦訳 (その2)

清瀬 卓

〈Sommario〉

Nella prima metà della sua storia autobiografica, la nostra protagonista, malata e ricoverata in un policlinico a Roma, decide coraggiosamente di farsi operare da un dottore, professore ed autorità di medicina. Lei l'ho soprannominato "Jack lo squartatore (*Jack the Ripper*)", perchè pur essendo un ottimo medico, non tiene assolutamente da conto sentimenti dei pazienti. Ed era, quindi, forse ancora rimasto vivo nei tempi di Enif Robert, l'eco degli omicidi orribili di alcune prostitute, che erano state barbaramente massaccrate, di tarda notte nella *Subura* Pontinese, coperta di nebbia e di smog, dal 31 agosto al 9 novembre 1888.

Nella seconda metà, invece, si racconta il lungo periodo di convalescenza, che trascorre la protagonista a Napoli con molte difficoltà, affrontando pazientemente il problema della guarigione troppo ritardata, dopo la sua operazione chirurgica fatta a Roma.

Per quanto riguarda l'estetica del Futurismo, è molto importante il modo di stampare il testo: scrittura, impaginazione, inquadratura, tipografia e così via. Nella traduzione giapponese qui presente, purtroppo, non si può riprodurre in un modo fedele il testo artisticamente originale della prima edizione, pubblicata nel 1919, a causa del numero di pagine rigidamente limitato per ogni saggio.

6. 〈切り裂き魔〉 ("JACK LO SQUARTATORE")

明け方に、目覚める。前日わたくしは化粧室へ行く途中、大きな手術室でチラッと眼にしたキラキラ光る手術器具の光景が、今ありありと眼に浮かんでくる。

とどき澄まされた刃のひんやりとした感触を覚え、ブルッと身体が震えて、思わず身悶えする。ひどく気が動転して、意味もなく嗚咽してしまう。

「ルチーア…ここから出てゆきたい！ 身支度するから、わたくしについて来るの。さあ！ …わたくしがここに居ないと知って、あの人たちがどんな顔をするか、考えてみて！」

その慌てふためきようを想像して、わたくしは笑ってしまう。搜索と神経衰弱気味の教授の激昂。彼は、その当日、手順通り手術刀を入れるつもりの人肉の一皿分が姿をくらましてしまったので頭にきている。

尼僧院長は、三度目の改宗を試みる。

「奥様、善良な神さまを…もし、あなたさえその気になれば…司祭を部屋に呼んであげます…。」

わたくしは、ほとほとうんざりして、^{かんしゃく}癪癪を起こす。

「もう止めて下さい！ …死とわたくしとの間の恥ずべき取り持ち役など、望んでいないことをお分かりでないの?! どうして、患者の意思を尊重しようとなさらないの? わたくしはあなたの信仰をとやかく申しません。一方、わたくしにも、あなたの信仰を拒否する権利があります。」

ルチーアは、わたくしの気持ちを鎮めてくれる。ほんの数分後、一通の手紙が届く。

《拝啓、心穏やかに、受け入れること。すべてうまく行きますから。動揺しないで。神はご存知だし、配慮して下さいます。

すべて上首尾に運ぶでしょう。エレオノーラ・ドゥーゼ拝》

神って??? 何なの? 神って? どこにいるの? 感じやしないじゃない。実感しなくても、わたくしにはどうってことはない。超自然的な励ましなど、わたくしには何の意味もない。わたくしは念には念を入れて爪の手入れをし、落ち着いた手つきでマニキュアをしっかりと塗った。^む無知蒙昧な連中が崇めている髻もじゃの神様のどうってことのない姿を思い浮かべると、眩暈がする。それに、世界を創り出し、運命を左右するより大きな力として、賢者たちが崇めている見えない神という抽象的な観念も、わたくしにとっては同じことだ。

この種の見解の如何なるものも、わたくしの心を動かさない。宗教にすぎる必要性を、わたくしの魂はまったく感じない。わたくしの魂は、独立独歩で立派にやっつけていける。

ルチーアは、わたくしが落ち着き払っているの、^{びっくり}吃驚している。彼女は全面的に、わたくしに従う。病気であまりに蒼白い手の先に、キラッと光っている桃色のマニキュアのこぼかり、わたくしが考えているとでも、彼女はたぶん思い込んでいるのだろう。

^{シスター}尼僧たちが、わたくしを迎えにやって来る。薄手の^{うす}襦袢の上に、^{シユミーズ}白い丈長の部屋着を纏う。^{さんざん}燦燦と陽光が降り注ぐテラスを横切る。不安そうに、ルチーアがわたくしの後から付いてくる。ちょっと立ち止まって、朝のすがすがしい大気を胸いっぱい吸い込む。このように花咲き誇る楽園がわたくしに微笑んでくれるのは、これが最後かもしれないという考えが、一瞬わたくしの脳裡をかすめる。

決然と手術室の控えの間に入る。入り口で、^{シスター}尼僧たちが部屋着も^{ローブ}襦袢も脱がせてくれる。腰までしかない消毒済みの短い^{マチネ}部屋着を着る。ルチーアの口もとに、情愛を込めて^{せつぶん}接吻する。中途半端だが、そっと手短かに今後のあれこれを彼女に頼んでおく。わたくしは、彼女の裡に秘めた感動を感じ取る。

「さようなら。…愛し^{いと}のわが子! …ジューリオに電報を打っておいてね。…」

下半身裸のわたくしは、気おくれすることなく、足早にだだっ広い部屋へと突き進む。^{オートクレーヴ}高圧熱滅菌器のところに^{ナース}看護婦がいる。^{にきび}面皰のある赤ら顔に真っ白い看護帽を着けているので、^{ごっけい}滑稽極まりない。わたくしの皮肉な本能が、その不恰好な身なりを^{しんびがく}審美的に批評してくれるようにと、ほんの一瞬、立ち止まったので、極度の心配はどこかへ行ってしまう。

見とれたような眼差しで、手術器具をさがす。何も見つからない。覆いを取り去られた硝子製の手術台に横たわる。背中が冷たくて、ビクッとする。

「手術器具はどこにあるの？」

「そのようなことは考えないで。…手術器具などありません。落ち着くことです。…そうそう。あなたは勇気がある。ご立派だ！」

陽気な助手の医師が、賑やかにやって来る。白衣を着る。わたくしが無関心なので、愉しそうに側に来る。

「綺麗な手ですね！ マニキュアがほどこされた爪が、ほらご覧、キラキラ光っているでしょ！ 看護婦さん、あなたの爪はそうではない。でしょ？ あなたの仕事は、上品でないから…」

ジョヴァンナ尼は、健康そのものといったあどけない微笑みを満面に浮かべ、透かし織の頭巾を被ったわたくしの髪を整えてくれる。彼女の笑顔は、優しく挑発的でもある。

「尼僧、わたくしが病室に置いてきた小さな四葉の白爪草をよろしく頼みます。面倒を見て下さいね。…気まますを云っているのじゃないの。判っていただけるでしょ。…好運を齎してくれる象徴の植物に水をやって下さいね。…」

赤毛の髪をした全身白衣の小柄で身軽な女医が、日頃手がけている骨の折れる職務に就く。胆汁質の気質がうかがわれる皮膚に、黄色味を帯びた禿げ頭をして、いつも顔を擧めている冷血漢の教授が、黙々と両手の消毒に取りかかる。同時に、小天使が、消毒されたガーゼをはがしてから、黒い印が入っている腹部を、たっぷり時間をかけて沃度丁幾で念入りに消毒してくれる。

尼僧たちの細心の下準備。

「医学が進歩して、将来は医師たちが我々のやっていることを笑い、おそらく我々が考えている細菌など信じない日が訪れるのではないのでしょうか？」

のしかかる部屋の重苦しい雰囲気は払いのけようと、わたくしに話しかけてくれるのは、助手の方なのだ。

昨日の《発作》とは正反対の束の間の勇気と、普段は見られない落ち着きを、わたくしは保つ必要がある。

教授は手術刀を入れるに先立って、刺すような鋭い視線を、憎々しげに時々わたくしに向かって投げつける。彼のことを、わたくしが注視することはない。計画通り、平静を保っていたい。彼の表情には、虫唾が走る。

体毛を剃られ、恥じらいもなく両足をお開いて、執刀医の手で間もなく捌かれる運命にある組板の上の鯉さながらに、素っ裸で横たわったまま、わたくしは医師と芸術や文学の話をして愉しむ。尼僧たちや看護婦は、異常な事態が起こってくれないので驚いている。ひとりが小声で、こう話しているのを耳にする。

「まるで奇蹟だわ！ 今朝は、ひと悶着を期待していたのに！」

わたくしは、これが見納めと無傷の小さなお腹を眺める。明日になれば、創痕で二目と見られない姿にされていることだろう。金属製の麻酔用面蓋¹²⁾と囁嚙仿謨¹³⁾の小壘を手にした女医が、こちらへやって来る。濡れた硝子製手術台の上で、ビクツとなる。近づいてくる手を避けようとする。

的確で冷静な優しいことばが、唇のところまで出かかっている、ことばにならない。恐怖で蒼白の口を動かして、時間稼ぎをする。

「ちょっと待って！ …尼僧、聞いて… 草を…先生、ここから出てゆくわよ！」

両手でぐっと力いっぱい押しさえつけられ、わたくしの素早い身動きがままならない。教授に助けを求めようとする。彼は、顔を合わせたくないで、さっとわたくしに背を向ける。

「先生！ …このわたくしの魂も肉体もあなたの手に委ねます！ …」

最初のことばを口ごもるのが精一杯だった。硝子製の手術台にぐったりとなる。自分の世界に引き籠もってゆく。わたくしを牢獄に繋いでおこうとする両手の敵意を感じる。親しい人々の面影が、目まぐるしく脳裡を過ぎる。口と鼻に、面蓋の猿轡が着装される。

浪のようにひんやりしたものが、顔にかかる。液体の強烈な臭いが、大脳まで上ってくる。…嫌な味がする。もうたくさん、窒息してしまうと云いたくなる。…小さな面蓋の張り付くような細かい網に苦しめられて、わたくしはもぐもぐ口ごもる。わたくしの眼差しは恐怖と責め苦で、きっと凄しいものだったに違いない。わたくしを押しさえつけている人々——8人だった——の誰一人として、正視しておれないのだから！

お父さんもお母さんもカル口坊やもジューリオも、遠くにいる肉親のすべては…もはや見えない…生命が…かき消えてゆく…心臓から大脳まで、一瞬の興奮。眩暈のような冷温感覚。四肢がビクツとなって、バラバラになって——墜落して——ゆく感覚。ところが、両手には、刺すような痛みがいや増してくる。

「尼僧をもうひとり！」——助手が命令する声が聞こえる。力が全身から抜けてゆく。ズキン、ズキンと頭痛のようなものを脳裡に感じる…。やがて、感覚は、昏睡の息吹に一気に強く包み込まれる。深くなってゆく霧——意識が薄れてゆく。——チリン、チリン…トン、トン、トン、トーン。

額とこめかみの上に、ほっそりとした指先の軽い感触がする——麻酔からの覚醒——生命のリズムを懸命に再開しようとする大脳の努力。熱い静けさ。痛みはまったくない。お腹のまわりに、何メートルもの脱脂綿とガーゼが、包帯できつく巻きつけてある。喉の渇きと雑音で中断された孤独感…。

とても重い瞼を開ける。これまで見たこともなかったほど垢抜けしたビアンカの姿がボーッと霞んで見える。彼女は、尼僧とヒソヒソ話をしている。良人と一緒だ。ルチアも母親と一緒にいる。わたくしの孤独に住みついた親しい面影に微笑んで、ふたたび瞼を閉じる。徐々に頭がすっきりしてくるにつれて、ジッとわたくしを覗き込んでいる愛しい顔に、わたくしは《ありがとう！》と口ごもろうとする。

まだ四肢に嘔囉仿謨の麻酔作用が効いていて、わたくしは身動きができない。でも、死ななかつたのだ。尼僧は憐れんでくれる人々を、穏やかに遠ざけてくれる。

自分では、出てゆかないで居て欲しいと願っていても、その意思が表現できない。

「行かないで、一人ぼっちなの、どうか…、ね…駄目よ…。」

どうしようもなく身体が重くて、黙って逆らおうとしても、ことばが喉元でつかえてしまう。皆が出て行き、居なくなる。眠気に襲われる。

真夜中に、水をくれるように頼む。一滴ずつ与えてくれる。耐え難い喉の痛み。強い睡眠薬を拒否しようと、胃が振れて、苦い胃液を吐瀉する。

「尼僧…、どのような処置が行われたの？ …どうしたのかしら？ …話しておくれ…、水を…とにかく水を…、氷も…、氷を…。」

寡黙で気高い尼僧は、注意深く、また辛抱強く、わたくしの発作と動揺とを鎮めてくれる。術後の第一夜は、想像を絶する。まるで臨終の断末魔だ。それだけ、生体が生命力を取り戻そうとする有機的な闘争の凄まじいひと幕なのだ。

二日経過すると、熱が出るのか見当もつかない。全身が焼けるようなので熱があると感じるし、体温計を見ている看護婦の眼つきで、発熱だと察しがつく。

「何度あるの、小天使？」

「全然、何も…、熱はありません…。気を鎮めて下さい。」

「わたくしは落ち着いています。ただ、体温計を見せて欲しいの。」

「いいえ、出来ません。病人は病人らしくしていなければなりません。教授の云いつけです。治療や症状については、教授にお任せしましょう。」

「教授って、どうしようもない人だわ、小天使…。体温計を見せなさい。」

信頼できる看護婦は、うんと云ってくれない。20年も病院に勤務していながら、教授に刃向かうことが出来ないの、わたくしのこうした率直な現状認識に怯えている。

女友だちが、やって来る。彼女たちの誰もが、ジュリーオに電報を打ってくれた。助手の医師も、彼に電報を打って、すべてがうまくいったと伝えてくれる。

「何が大丈夫なものですか…全然よくないです、先生！ 熱が出ていますもの。」

「ご心配ご無用です…。嘔囉仿謨中毒による微熱です。よくあることです…。そうじゃないですか、先生？」

「ええ、そうです…。特に、今回のような場合は、驚く必要はありません…。奥様、あなたに大量の嘔囉仿謨を投与するの必要がありましたから。眠っていらながらも、あなたは身動きしないでおれませんでした！」

何が何でも手術の手順が知りたいと思う。それを再現しようにも、情報量が少なすぎる。

他の事を話題にしたいと持ち掛ける。手術は1時間40分を要し、これといった事故もなく無事終了した。しかし、病巣部分は、随分と広範囲に及んでいて、全摘出の必要があった。病魔に侵され始めていた子宮は、缝合針¹⁴⁾を深く入れて縫合した。

看護婦や尼僧から、あちこちでバラバラの情報を他にも集める。わたくしは手術の現場を知り、再現したいと思う。部分的に、それが叶う

判るのは、教授が細心の注意を払って皮膚の縫合¹⁵⁾をやってくれたので、瘢痕¹⁶⁾がほとんど残っていないことだ。従って、彼は美容面に配慮して、長時間をかけて難しい手技の手間がかかる縫合をやったのけたのだった。看護婦の話では、もう何年も前から、手がけたことがない手術だったという。

「ですから、お分かりでしょう、彼はあなたに特別の注意を払ってくれています。」

この女性は、気の毒なことに、わたしたちの間に生じた厄介な感情の行き違いを解消して、違和感を払拭したいと望んでいたが、反目は逆に怒気を含んでより激しいものになった。

わたくしの意地悪な笑い。縫合が終りかかる頃、重苦しい沈黙を破って、彼が皆に聞こえよがしに、次のようなことを云ったと知って、わたくしは歯軋りするほど無性に腹が立った。

「気の毒に！ まだ子供を産みたいとのことだったが、その希望に添うことが出来なかった。」

その男の穏やかだが、冷やかな皮肉が、わたくしの内なる魂をじわじわと傷つける。

晩方、彼はわたくしを診るために病床の傍らにやって来る。手に電報を持っている。看護婦に昼間の状態をたずね、体温記録を見る。憎たらしい声が、そっけなく訊く。

「どうです？」

「さあ、良くないようね…。」

黄色い顔は、怒りでやや歪んでいる。氷のように冷たい声が、続けて云う。

「ここに一通の電報を持ってきました。支払い済みの返事が同封されています。奥様、返事はあなたがなさい…。このわたしが患者女性の親族全員に便りを出さなければならぬとすれば、とんでもない目に合うことでしょう！」

わたくしが怒りの発作に身悶えしだした時、彼はまだ戸口を出かかっているところだった。衰弱して裏返っている胃から喉元までグッと突き上げてくる胆汁を、ベツと彼の背中に吐きかけてやりたい。

尼僧を呼ぶ。しゃくりあげながら、洋筆と用紙を何枚か持ってきてくれるように頼む。確認のことばを、ほんの数語認める。それは、絶望の電報が、次のようなことを書いて寄こしたからだ。

《直接ノー報ヲ乞ウ。名状シガタイ沈黙ト、担当助手ヨリ電報アリ…、等々。》

動揺ばかりの夜。熱が上がる。朝になって、医師と女医に向かって感情をぶつける。彼らは、教授は手紙恐怖症だと説明する。わたくしは反論する。

「あなたの方が、恐怖症に罹っていて、とっぴな振り舞いをされる！ どうして神経質な他人を認めようとなさらないのです？」——助手は、わたくしにこう云う。

とにかく、彼も女友だちも男友だちも緊急の電報を打つ。それから、云うまでもなく電報が戦時検閲のために取り置かれ、ジュリオ自身も、ちょうどその当日に戦場となったカッターラを発つことは出来なかった（通行証などが必要となったのだ）。

その日の晩、再度教授の診察。彼の手には、新しい電報。彼はそれを病床に置くと、電文通り

のことばを、こうくり返す。

《家族全員が正気デナクナッテシマッタ。思ウニ…》

「田舎者！」——身動きすると、縫合したての傷口が癒えていないので、わたくしは菌の間からヒューッと音を立てて、掛け蒲団をかぶって怒りに身を振る。

「動かないで！…死にたいのですか、あなたは？」

彼も、グッと歯を噛み締めている。さっさと部屋から出てゆく。今回の電報は、義兄からのものだ。彼も便りを欲しいという。わたくしの姉だけが、病気が重いことを知っていて、とても苦しんでいる。

彼にも確認の電報を出す。熱は、ますますひどくなってゆく。

夜中、フレスキと話がしたくなる。腹を切り裂く監視人の許に、もうこれ以上居たくない。彼のことを、わたくしは〈切り裂き魔〉¹⁷⁾と命名する。

哀願したり、後悔してみたり、泣きべそをかいてみたりして、わたくしは気の毒な医師に感情をぶつける。彼は、苛立ちが感受性に訴えかけることで、注意深い一個の有機体の心の琴線に触れる場合、その苛立ちが警告してくれる絶対的な価値に気づき始めている。

「わたくしはここを出たい。転院させてほしい。ここに居続けると、わたくしは死んでしまう。胆汁で息が苦しい…。連れ出して頂きたい、どうかお願いします！」

かろうじて、じっとしていることが出来る。ギュッと手を握り締めて、もがく。絶対安静が必要な縫合の傷のことを考えて、彼は心配でたまらない。

最後に、わたくしはジュリオの到着を待つことにする。彼は、明日中には着くと、医師に知らせていた。

看護婦が、硝子容器に入った拳大のくすんだ色の大きな塊を2個見せようとしてくる。それは、わたくしから摘出した解剖標本¹⁸⁾だ。

「さっさと…、持って行って！…」

サッと一瞥して、身震いする。

ドゥーゼが見舞いにやって来る。わたくしが発熱していると知ると、彼女は病室に入りたがらない。名刺を置いてゆく。半眼で熱心に読む。

《いつものように、お見舞いに、ここへ来ています。あなたを動揺させないで、会える機会を待ちます。また来ます。ご安心なさい。

あなたに、それから坊ちゃまにもたくさんの接吻を。ご静養を。

エレオノーラ》

ふたたびジュリオにも幼い子供にも会える喜びを考えると、教授の短時間の回診を我慢でき

る。
尼僧たちと女友だちが念入りに計画してくれた出会いは、ぐっと感情を抑えたものになる。わたくしは、幼い子供の声が、以前よりずっと真剣で力強いように感じる。

ジュリオにあれこれと細かい説明をする。彼はわたくしに疲れてはいけないからと、黙って

いるように云う。子供が洋卓テーブルの上に見つけた針山ピンクッションを持って部屋の隅すみで遊んでいて、わたくしたちの話を聞いていないと思うと、わたくしは自分の卵管サルビンクス¹⁹⁾の状態がどうだったかについて、心ゆくまで説明する。

「どうしても全部てきしゆつを摘出しなければならなかったの、分かるでしょ？ …卵巣²⁰⁾も付属器も結合組織も…」

「小さなお腹なかの中に、卵を産んでくれる一羽の雌鶏めんどりも飼かっていたの？」——可愛い声が深刻そうに云う。

遊びを続けながら、我が兄こが何の気なしに語ったことばを聞いても、わたくしは笑えない。瘻けい攀けんするように笑うと、腹部しゅじゆつぞうの手術創が痛み始める。

やがて、看護婦ナースは、ジュリオが教授に与えた良い印象について話してくれる。教授は、長時間わたくしの病気について彼と話をしたそうだ。

「よく出来た人物に違いない！ 彼と奥様とでは、まったく好対照だよ！ ほんとうに感じのよい、好人物だ！ …」

わたくしは冷淡な笑いを浮かべる。

「その通り！ …彼の見方では、わたくしなど…手に負えない部類なのだ！ 忍耐ぎりぎりのところで、何とかわたくしの相手をしているのだ。」

医師が云う。

「もう、嘔囉クロロホルム仿謨性の発熱²¹⁾は長くは続かないでしょう。やがて恢復します…我慢がまんなさい…」それからジュリオに向かって、

「あなたから奥様に、そうおっしゃって下さい。」

「ねえ…お前…お願いだから…」

無限の愛おしさがこみ上げてくる。医師や女友だちが出て行き、わたくしたち二人だけになる。夜ふが更けると、おそらく習慣と正反対の性格の相違おだのせいで穏やかになった感情が、我が殉教じゆんきやうの病床ベッドに素晴らしくよみがえってくる。

わたくしたちは、以前よりもっと強い絆きずなで結ばれているように感じる。彼は病巣てきしゆつが摘出されたことで、わたくしの苛立いらだちがおさまり、普段の状態もどに戻ってくれるように願う。そのことを、彼はわたくしに語る。

わたくしは、何とか微笑ほほえんで、それを約束する。わたくしも、そうあって欲しいと思う。

「知らないだろう？ 余命2ヶ月だと教授は告げていたのだ…それほど重篤じゅうとくだったのだよ！ もう、これからはよくなるよ、元気に…ねえ、お前！ …」

熱はまだ続く。朝の回診かいしんにジュリオも同席する。教授は氷のように冷たいけれど、不親切ではない。ジュリオにしか話そうとしない。

彼らの話を聞きたくなる。尼僧シスターに邪魔じゃまされる。でも、看護婦ナースは、くり返し《…病状じゅうとくは重篤で、手術オペは難しいものだった》とわたくしに打ち明けてくれる。

「つまりは、嘔囉クロロホルム仿謨性の発熱に過ぎない…」——彼は晩のいつもの時間にやって来て、そう

くり返す。

「教授、この熱は一般的にどのような経過を辿るのでしょうか、教えてください。」

彼は引き攣った蒼白い顔をして、皮肉な渋面をつくる。

「うーん、奥様…天の神様に聞いてみる必要があります。…」

そして、彼はこうした気障な嫌みを云ってから出てゆく。

その晩、出発予定のジュリオも居合わせる。腹立たしい思いのわたくしは、悔しくて仕方がない。それでも、ジュリオが心配しないで出発してくれるように、作り笑いを浮かべる。

熱がさほど高くないので、どうにか自分一人で応戦することが出来る。

「ちょっと粗野な人物だね…」——教授が出てゆくと、ジュリオは云う。

「気にしないで…云わせておくの…慣れっこになっているし…興味もないわ…あなたに愛してほしいの。」

彼は安心して出発し、仕事を再開しなければならない。すぐまた戻ってくる予定だ。

それから、わたくしは無言の辛い闘いが必要なのだと自分に云い聞かせる。無愛想な科学を相手に孤独な戦いを遂行するのも一興かと考え、それを愉しみ始める。

わたくしは手紙を書く。

《教授殿、昨晚は、即座に返答するゆとりがありませんでしたが、あなたこそ出来ることなら、天にまします我が神のみもとへ赴いて、今回のような場合の説明を聞かれる必要がございます。

わたくしは、こちらに留まります。わたくしは、科学だけを頼りにしております。ですから、あなたの同僚にお願いして、その方がはるか昔の学生時代に学んでおきながら忘れていた可能性のある嘔囉仿謔性発熱に関して、もう一度あなたのご自宅でご教示賜ればと存じます。

そう致しますれば、わざわざ天上の神様のご意見をうかがいに出向くまでもなく、明日になれば、わたくしに委細をご説明して頂けるのではと考える次第です。

エニフ・ロバート拝》

それを看護婦に託す。小天使は眼鏡をかけて読み、睦目する。彼女には、教授に嘸み付くなど前代未聞の所業なのだ。彼女はここ数年、教授の傍若無人な振る舞いに耐えてきた。何度も泣いたことがあると、わたくしに告白する。でも、と彼女は付け加えて云う。

「腕は、とても素晴らしいの！ …やり手なの！ 怒りっぽい人だけれど、怒りはすぐにおさまる。逆らわないことよ。お願いするわ。」

手紙は取り置かれた。善良な彼女は、面倒なことを出来るだけ避けようとする。

朝、また発熱。わたくしの病床には、マリーアが居てくれる。尼僧たちや女医と一緒に、彼が部屋に入って来る。

ドゥーゼの写真の脇に飾ってある白薔薇の大きな花束も、苦境にある金髪に友人がくれた赤い薔薇の花束も、彼の感情を害するに違いない。事実、彼の顔は動揺を隠せない。その毛の薄い皮膚からは、退屈と苛立ちが滲み出ている。

わたくしは術後ずっと熱があるので、牛乳や白湯などを摂取することが出来る、それをかたく

なに拒否する。ただ氷の入った^{ミネラル・ウォーター} 鉱泉水だけを飲む。

「具合は如何です？」——片手で手首を押さえて脈を診ながら、^み 空疎な声^{くうそ}が訊ねる。

「教授…まだ熱があるのです。」

「熱だって！」——彼は猛烈な^{かんしゃく} 痲癩をおこす——「熱があるなどと、いったい誰が云ったのだ？」

憤懣^{ふんまん}やるかたない彼は、くるりと背を向けると、こう断言した。

「^{こんりんざい} 金輪際、このご婦人に体温の計測結果を告げることはかたく禁じる。こうでもしなければ、事態はますます悪くなって、とんでもないことになる。」

^{ナース} 看護婦は、一度も体温計を見せていないと云おうとする。わたくしも頭に来る。今にも飛びかかりたくなる。それをグッと堪える。

「わたくしに、体温計を見なくてよいとおっしゃるのですか、教授…可笑^{おか}しな話です！ 血管にも、血液にも、発熱は感じられるのです…暴君^{タイラント}のような振る舞いは止めていただきたい。」

彼も、グッと堪^{こら}える。わたくしが何か食べるようになっているのかと、^{ナース} 看護婦に訊ねる。^{ナース} 看護婦は、嵐の到来を感じている。わたくしに罪のない眼を向けて、^{あいがん} 哀願する。彼女が返事をためら躊躇っているので、わたくしが割ってはいる。

「体調が良くないので、食べていません。水、ただ水だけは受け付けることが出来ます。他のものは何でも吐き気がします。腹部の一箇所、この上のところが痛むのです。不可能です！」

「気まぐれなのだ！」——立腹している声が、ふたたび続ける。そして^{ナース} 看護婦に向かっては、

「^{がんこ} 頑固を通すようなら、^{チューブ} 導管を用いて、^{ミルク} 牛乳をどどん遠慮なく注ぎ込みたまえ！」

^{ベッド} 病床から起き上がろうと試みる。悲痛な表情をして、手荒い行為を考えただけで、どきまぎする。柔和な^{シスター} 尼僧の顔が打ちひしがれ、わたくしは途方もないことを口にせざるを得なくなる。自分の絶望感を苦しげに叫ぶ。発作的に正気を失って、うわ言をとめどもなく吐いて、しゃくりあげる。

マリーアが制止してくれる。出来るものですか——わたくしは云い続ける…ふたたび^{クッション} 枕に身を投げ出すと、激しく泣きじゃくる。教授は吃驚して返事もしないで、その様子を見ていたが、^{つぶや} こう眩きながら出て行く。

「ああ、手に負えん！ まったく手に負えん！」

2時間以上、わたくしは正気でなかった。やがて、わたくしは自分の医師に、そのことをありていに話す。もう一刻も早くここを出てゆきたいと考え直す。もう一度、彼はわたくしを宥^{なだ}めてくれる。彼は話してくれるだろう。明日の回診に立ち会ってくれるだろう。

^{ベッド} 病床の脇にピアンカが居る。少しの間、席をはずしてくれるように医師が彼女に頼む。

わたくしの^{ほうたい} 包帯を解いてくれる。

ようやく、わたくしは自分の腹部を見ることが^{かな} 叶う。でも、^{なが} 眺めてみる勇気が出てこない。医師の^{まなざ} 眼差しを借りて見る。あまり安心させてくれるものではない。

教授は手術創^{しゅじゅつそう}を見ると、やや背後を振り向き、ただちにこう命じた。

「手術刀を。」

わたくしはブルッと身震いして、激痛と恐怖に狂乱の発作を起こす。

絶叫する。

「駄目！ 眠っちゃ駄目！ …人殺し！ 藪医者！ 起きているの、いやだ！ 切開は、いや！ 自分の肉体はあくまで自分のもの！ …わたくしの気の済むようにする！ …そうする権利がある…」

教授はいったん部屋を出て、廊下で待機している。わたくしの医師は敏捷な人で、振れているところを固定してくれる。

「何でもありません…化膿している箇所を、ほんの少し切開するだけです…そんなに臆病風に吹かれないで下さい…」

卑怯者！ — このことばに、わたくしは面食らう。でも、激情の発作は鎮まらない。わたくしは絶叫する。片手を噛んで、歯をグッと食いしぼる。尼僧たちが脚をつかむ。医師は肘でわたくしの胸を押し付ける。腫れた患部の丸出しの腹部は、捻転を起こす可能性がある…それを他の手が、グッと拘束する。

「卑怯者！ 人殺し！ 藪医者！」

わたくしを押しさえつけておくのに、彼らは苦勞する。わたくしの口をふたたび封じようとする手の力を感じながらも、絶叫し続ける。ぶよぶよした肉に、スッと入ってくるひんやりした刃先を感じる…冷え切った腹部に、ピューッと膿汁の飛沫がかかるのを感じる。

「済んだ！」

締め付けが緩むと、わたくしの力も抜ける。自由にしてくれる。わたくしは身動きしない。ひどい痛みで、喉元から、すすり泣きの声もれ出る。敗北を喫して、ぐったりとなったわたくしは、眼を閉じたままだ。

教授が両手で膿瘍を搾り出す。無抵抗なわたくしは、苦痛のうめき声を発しながらも、されるがままになる。

「すっかりたちの悪いものが出てくれるといいが！」 — 冷徹な声が云う。

それは、ぴしゃりと鞭で殴打されたような感覚だ。顔を上げ、動揺から解放されると、わたくしは大きな声で、はっきりとこう云う。

「教授！ 昨日、わたくしがあなたに向かって云ったことばを撤回は致しません…でも、あなたが命の恩人であることは、おそらく肝に銘じておきます。」

「ほほう！ 今日、また褒めちぎるのですね！」

皮肉屋で、冷血漢で、執拗で残酷な彼が、部屋を出てゆく。女医が、ふたたび包帯を巻いてくれる。優しくわたくしを宥めてから、ピアンカに世話を任せる。

間もなく、良人の方が彼女を迎えにやって来る。彼らは、ジューリオに電報を打って、万事が好調だと知らせてくれる。実際、担当の医師が、意気揚々とふたたび部屋に戻ってくる。

「ほら、元気そのものじゃないですか！ ここ2、3日で確実に熱は下がるはずですよ。わたした

ちは勘違いしていたのです。嘔囉仿謨の影響など無関係でした。絹糸で縫合した箇所の化膿が原因の発熱でした。」

わたくしの医学と外科学に対する信頼感が、大きく揺らぐ。そこで訊ねる。

「またどうして縫ったところが化膿したのでしょうか？ …縫合絹糸の滅菌処理が不十分だったのでしょうか？ …」

「ああ、予想だにできなかったことです！ 奥様、縫合絹糸を支える力がなかったのは、あなたの腹部組織の方です…そうなのです、絹糸はとても傷んでいました…想像していたより、はるかに。あなたの肉体には絹糸を吸収する力がなくて、その抵抗力の低下が化膿の原因です。」

このような説明では、わたくしはあまり納得できない。脆くなった肉体という指摘は、残酷だ。わたくしの抵抗力より、ずっと強力な免疫力だって駄目にしかねない。幸いにも、切れ味の良い論理がわたくしを助けてくれる。わたくしの論理は実に明解だ。自己防衛本能から、わたくしの脆弱な組織という説を力づくでねじ伏せようとする。

「そうじゃない。違うわ。そんなことはありえない。じゃあ、どうして組織が、ただひとつの縫い目だけに耐えることが出来なかったのでしょうか？」

わたくしは、熱を込めて医師にそのことを話す。あらん限りの力を出して、自己防衛を演じる。原因が絹糸に違いないと云い張る際には、わたくしは涙声になっていた。

最後の最後になって、ようやく治療に着手したわたくしの病状が極めて悪かったのだと、過酷な職務柄、そのことをあくまで強調する。

ところが、気の毒にも、看護婦がつい本音を漏らす。彼女は滅菌処理の責任を取って、とても気の毒な様子で、風変わりな伊太利語で、わたくしにこう漏らす。

「でも、運が悪いと…もう、どうなったか知れやしない！ …じゅうぶん注意していたのに！ …」

彼女のことは、懺悔めいていた。わたくしは、自分の頑健さに対する自信——科学そのものがわたくしから奪おうとした自信を取り戻せるので、それを歓迎する。…ああ、職務、それは人間の思想が目指す高い目標の根底にある職務なのだ。

ところが、小天使は深く悲しんで、「お分かりでしょ？ …もし聖体拝領をお済ませであれば…」と付け加えて云う。

熱は下がらない。教授は休暇を取っていなくなる。わたくしのは、担当の医師である女医に任ず。毎日の投薬。体温は上がったりがったりする。徹底した投薬による過酷な戦い。

わたくしは医療器具に恐怖を感じる。もはや我慢することが出来ない。わたくしの病床で医療器具を手に、たっぷり半時を費やしても、傷ついたわたくしの肉体に処置が出来ないままの女医の前代未聞の忍耐力。

彼女は、なんとか皮膚消毒を施してその場をやり過ごす。明らかに、教授に期待がかけられる。

ドゥーゼが、ある日、大きな緑の葉を付けた鉢植えを抱えて、息を切らせて戸口に現れる。妖精の魔法さながら、殺風景な部屋は、美しい温室に様変わりする。尼僧たちは彼女が待機して

いる自動車から下ろした他の植物を持って、彼女について入ってくる。

陽気で、ひと目見るだけで気持ちが和らぎ、賞讃の気持ちで、背筋がゾクッとなる独特の魅力を振り撒き、軽快でにこやかな彼女は、率先してわたくしの心にオアシスを作り出してくれる。彼女は話さないように要求して…乾いたわたくしの額に身を屈め…そこに何度も口づけしてくれる。そして妖精さながら…姿を消す。

ある日の晩、ジョヴァンナ尼が内気な女の子のようにどぎまぎしながら、たおやかに、修道院長の聖名祝日のために、尼僧全員を代表して、一通の美しい手紙を書いて欲しいと依頼にくる。

神聖な憧れと聖母教会への穢れなき出家に重きを置くわたくしの文章は、優しく一途な魂を魅了する。尼僧たちは誰もが感動して、わたくしのところへやって来ては礼を云ってくれる。無神論者のわたくしは、彼女たちの原初的な信仰心を、他の感動的なことばで表現するすべを知った。尼僧たちが修道院長のために開く子供じみた宴会に列席する。院長が礼を云う有様は、尼僧たちより、もっと子供じみている。

午後3時、検温の時間。

女性患者の場合は、臍で検温する。そのために特別に製作された精巧な体温計が幾つもある。体温計を抜き取るまで、小天使は5分間待っている。郵便係の尼僧が入ってくる。この女性は、気の毒にも、わたくしを改宗させる考えにとりつかれている。何度も、彼女は宗教的な話題に入ろうと試みた。手紙を2通、わたくしにくれる。

わたくしの部屋には、ルチーアもある。その尼僧は看護婦を見ると、すぐに察した。

「おお、奥様、御免なさい。検温時間でしたね？ わたくしは、あなたの守護天使に、こっそりと入ってゆくように頼むつもりです。」

ルチーアは、可笑しくて思わず唞でしまう。でも、彼女は、神聖な話題に入ってゆくための不本意ながら春画的で極めて不当な手段に、このわたくしがどのような返事をするか、その素敵な返答をしきりと期待している。

「さあね、わたくしは、この種の問題に関して、彼女が天使に頼むことに慣れているのかどうか、一向に知りません。とにかく覚えておいて頂きたいの。わたくしに守護天使などいませんから。」

気の毒に、その尼僧は赤面して、すっかり取り乱し、気抜けして立ち去ってゆく。

7. 新たな攻撃に備えながら (ASPETTANDO UNA NUOVA OFFENSIVA)

〈切り裂き魔〉が戻ってくる。

そうしていると、不意に、何度も刺し込むような左脇腹の痛みおそに襲われる。女医は、癒着部分のひどい炎症を確認する。

高熱が出る。

わたくしは教授に楯突かないことに決める。休暇中に、彼のイライラが改善されていればよい

のだが。彼の留守中、何日も、わたくしは彼のことを話題にしたが、そこには、憎悪と恐怖と侮蔑と怒りと皮肉が籠っていた。わたくしの談話の大部分は、彼に関連したものだ。た。

彼は、実に冷徹だった。《こんにちわ》という普段のわたくしのことばにも、返事すらしてくれない。ほんの一時、彼と二人だけになると、わたくしは控えめに、悲痛な思いで訊ねてみる。

「教授、どうかお願いしますから、どのような問題を抱えているのか、わたくしの中でどのような不具合が生じているのか、説明して頂きたいのです…お願いします。」

彼は返事もしないで、平然と窓の外を眺めている…

ジュリオは、ミラノからしきりと見舞いに来てくれる。別の教授の診察を受診できるようにとり計らってくれる。しかし、病床から動けなければ、それすら難しい。フレスキはわたくしたちを思いとどまらせ、元気付けてくれる。化膿しているのだから、発熱が続くのだ。

わたくしは死を恐れる。熱が上がる。脇腹の痛みがとても激しい。わたくしは、自分の告別式の知らせを用意する。

《外科手術の犠牲となって、エニフ・ロバートは30歳で逝去。火葬を希望。祈祷も献花も不要。死亡した女性から教授殿…病院の医長…への特別の感謝。外科手術によって、永遠の生命を授けてもらったのですから。》

わたくしの女友だちは笑って、わたくしを狂人呼ばわりする。わたくしの医師は、手に負えないと云う。今後、手術を勧める前に、患者の身体でなく、その心理を研究しなければならないだろうとも云う。

告別式の知らせを前もって公表すると、小天使は肝を潰す。その慌てようは、滑稽そのもので、わたくしは彼女を安心させなければならない始末だ。そこで、彼女はわたくしと教授との対立を、次のように説明する。

「無駄です…あなたがたはあまりにも似た者同士なので、理解し合えないのです。あなたがたは感情の発散の仕方も同じなら性格も同じですし、うまくいかない場合に歯を剥きだす様子も同じです。」

「でも、小天使、わたしは病人じゃないわ。それに彼は少なくとも礼儀を心得ていなくて…屠殺人なのは、どうかしら。…」

教授は、わたくしとは口をきかない。ジュリオには、特にわたくしには安静が第一だと云う。

「でも、彼の性格からすれば、それは実に難しいことです、奥様。」

「自分の体温を知りたいの、小天使。」

「いけません。それは出来ません。教授の厳しい云いつけですから！」

体温計を入手したいという思いにとりつかれる。女友だちは尼僧たちから云いくるめられているので、入手することを引き受けてはくれない。策略をめぐらして、とうとう体温計を一本手に入れる。手紙で薬局を営んでいる才媛に依頼した他の様々な物品の入っている封印された小荷物箱に体温計を入れて、買い物係りの尼僧がそれと知らずに持ってきてくれる。

安心できるのだ！

入院 56 日目に、わたくしは初めて起き上がる。朝方の治療は、わたくしには苦痛だし、皆の心配事だ。

狭い拷問台に寝かされて、苦痛にわたくしは身を振り、触られないようにする。わたくしは、皮膚の表面に出ている縫合部分の抜糸をさせない。〈切り裂き魔〉は、銀のとても長い摂子²²⁾で、ヨードチンキ²³⁾をたっぷり含ませた綿花を、炎症を起こして口を開けている手術の創口に塗り付ける。わたくしは叫び、止めてと云い、ぐっと堪え、哀願し、涙する…。うわ言や「ウウー」という意味深な呻き声が激痛に混じり、歯は粉々になるかと思う程きしる。

「見ちゃおれないわ。本当に！」——外科治療の当日、期待を裏切られた尼僧が云う。

長くは続かないことは、わたくしには分かっている。皆がわたくしの突拍子もない振る舞いに疲れてきていると感じる。ジョヴァンナ尼は、他の尼僧たちよりずっと頼りになる。その愛情のこもった善意は、まさに奇蹟だ。

わたくしが一生懸命に問い質しても、教授は平然として返事すらしてくれない。

「どうして創口がふたたび開いたのか知りたいのです。わたくしは退院できるのかどうか知りたいのです。」

彼の黙殺に、わたくしは腹が立つ。

女医は、栄養剤注射が始まるまで、もう少し辛抱するように忠告してくれる。わたくしは、断固きっぱりと拒否する。注射など、もはや二度と受けたくない。…女友だちは、わたくしのことをからかう。手術を勧めたことを悔いているフレスキは、ぶんぶんしている。《こんなに頭が変になるのなら、死んでくれていた方がよかった！》——彼はそう考えているに違いない。

「彼女が退院する日に、この部屋に必ずや一枚の碑版が取り付けられるだろう。尼僧たちは、感謝の頌歌を歌うことだろう。」

「先生、正直におっしゃって下さい…わたくしのことをどう思ってもらえるのか、ありていにおっしゃって下さい。」

「貴女がどんな人なのか云い当てるのは難しいですが、敢えて云わせてもらうなら、貴女の頭脳は、きわめて女性的な肉体に比べて、あまりに男性的なように思われます。」

わたくしは、ますます落ち着かなくなる。ある日の朝、部屋の扉をわたくしは開けたままにしおきたいのに、看護婦が閉めようとするので、彼女と口喧嘩になる。

「開けたままなのを教授に知れると、大変なことになります！…腹立たしいったら。」

「その教授って、いったい何者なの?! ところで、ここは療養所でなく、ひどい牢獄ね。所長は、24 時間に女囚たちがどのような所業に及んだかを、毎朝見回りにやって来る。…」

わたくしは食事のちょっとしたメモのことで、病院の出納係りに相談する。彼はきわめて丁寧にわたくしを納得させるように配慮し、わたくしの云い分を認めてくれる。彼がたいへん礼儀正しい人柄であると感じ、わたくしは教授との間がうまく行かないことを、彼に話してみたくなる…

もはや、彼らも教授のことは承知している。彼は神経を病んでいるけれど…腕は確かなのだ。

(いったい医学の世界で、腕が良いとは…何を意味するのだろうか?) わたくしは3度目の質問をしてみる。

「教授、おっしゃって下さい…わたくしの病状はどうなのでしょう。」

今回も、もっと徹底して奇妙で不愉快な黙殺…そこで、わたくしは彼の自宅宛に怒りのことを連ねた一通の手紙を書く。投函する前に、女医に読んで聞かせるへまをする。彼女は当然のこと、その内容を教授に知らせ、手紙は開封もされずに、《第2号室の夫人》の住所宛に戻ってくる。

葉書には、次のように書く。《同じ類の行為を経験した後なので、あなたの無礼な行為に驚きはしません。ただはかり知れないほど横柄な虚勢を張っているながら、震える真実を読み取る勇氣すらお持ち合わせでないことを不思議に思います。》

わたくしが葉書を出した直後に、教授が部屋に入ってくる。彼の顔は、ひどく蒼ざめている。彼は、かすかに震えている手を拭う。彼は激昂した声を張り上げて、わたくしに食ってかかる。

「奥さん、もう我慢がならん。…どこへ行っても、貴女はわたしを翻弄する…皆貴女にうんざりしている…貴女のご乱行に、わたしは堪忍袋の緒が切れた。…」

わたくしも蒼白になって、よろめきながら、負けずにやり返す。

声は控えめながら、応酬がかなりの時間続く。

彼は「もう我慢がならん」をくり返す。

それでも、わたくしは憤慨する。病床へ持ってこられた電報のこと、自分の病気について黙殺されたこと、左脇腹の痛みをなくして欲しいとの願いを無視されたことを思い出す。

彼は息を切らしながら、まくし立てる。

「わたしは電信技士じゃない…貴女が訴えるひどい痛みが、本当だとは思われない…貴女の本当の病名を、わたしは申し上げたくない。人情というものがある。それを告げれば、きっと貴女を苦しませることになる。」

わたくしは、全身が凍りついたように感じる。思わず洋卓に手をついて、わが身を支える。

「貴方は、心とやらが、いったいどこで寛ぎを覚えるか、ご存知でない。それに、今では貴方がおっしゃりたいことは十分わかりました。」

「わたしは紳士として振舞ったままで。初日から良心的な専門家からすれば無礼な申し出を貴女が幾つかしようとした折に、わたしは自分の立場をはっきり申し上げるべきだった。…」

その時すぐだったのかどうかよく覚えていないが、やがて前よりひどい痲癩玉を破裂させる。女医が居合わせていて、冷静なことばを述べて、仲裁しようとする。互いに長い間ぐっと我慢してきた怒りを思いっきりぶちまけて、わたくしたちは尚も云い争う。わたくしは、病名を知りたいと、なおも食い下がる。

「いいえ。それは貴女のご主人にしか申せません。貴女のことを手ひどく扱ったなどと、まだ主張されるのなら、貴女を告訴するから覚えていなさい。」

「なんとひどいことを！ 言語道断です！ 貴方の性格からすれば、数学者にでもなるべきだったのです！」

「何を云っているのです。貴女のご機嫌取りをすればよいのですか？ …あたりさわりもないことを云ったり、ご本や花のことを話題にしていればよいのですか？ …」

ほら、地金が出た！ …彼はおよそ美的な装飾品はことごとく毛嫌いし、わたくしの精神を慰めてくれるようにと、女らしい美的感性が身近に並べてくれた美しいものは何でも頭から軽蔑してきたのだ。すでに予想していた通りだ。今となつては、はっきり断言できる。

「開封すらずに、手紙を送り返すとは、何と無礼な…そうじゃないですか？ しかも、わたくしは単に病名を教えてくださいとお願ひしただけなのです…」

「貴女の家族に説明するつもりです…」

「それから、葉書を今朝わたくしは貴方宛に書きました…」

「葉書に無礼なことが書かれているようなら、だたちにその葉書を弁護士のところへ持ってゆき、貴女を告訴します。」

「どうぞご随意になさって下さい！」

「また、癲狂院へ貴女を入れる権限だって、わたしにはあるのです、お分かりかな？ …貴女は狂っている、まったくの狂人だ。」

「ほほう！ でも、帝室検察官がいるじゃないですか…」

「いいえ、出来ません。癲狂院からあなたを退院させることは、誰にもできません。あなたは狂人なのだ！」

ジュリオが迎えにやって来る。わたくしの医師も、こうした環境からわたくしを移すことが、病氣恢復への第一歩と考える。

その後、教授は姿をまったく見せない。プレスキにわたくしの病状について教えてくれるように聞いてみるが、埒が明かない。重い病魔に冒されているとの考えにとり憑かれて、それが頭から離れない。いったい何なのか？ …女医も小天使も皆がシラを切っている。ジュリオは出来る限りわたくしの気持ちを宥め、病氣は必ず全治すると教授が太鼓判を捺してくれたとはっきり云う。…彼は教授とじっくり面談した。わたくしには診断書を隠しておく方がよいと云われている。とうとうわたくしはその診断書を手に入れることが出来る。必死になって、それを貪り読む。

《夫人の疾患は、乾酪状の卵巣・卵管炎で、診断不能の両側粘着性腹膜炎²⁴（コッホ）を併発、よって両側付属器官切除術を行う。》

《手術によって患者は快癒した。しかし、左腸骨窩²⁵に若干の浸出液が残存していて、時間が経過するに従って吸収される単純な炎症性のものに過ぎないのではないかと判断される。》

《ドゥランテ式注射²⁶による治療を、当分は行うように指示する。》

《医学博士…、》

《婦人科外科主任》

「診断不能？ コッホ²⁷？ …」—— 獨逸人科学者の名前がどのような恐るべき病氣と結びつい

ているのか、その時すぐには見当がつかない…ただ診断書がまったく正確でないといわたくしは考
える。

開腹し、観察し、処置を行い、ゆうに76日間にわたる治療を患者にほどこしておきながら、
診断書に《おそらく》などと書く権利は、外科医にはない。白黒ははっきりさせなければ。わたく
しは単独でもう一度教授のところへ出向いて、もっと正確な病名を要求したいと思う…

助手の医師に向かって、わたくしは数限りなく悪態をつく。彼は彼なりに、それを我慢して受
け流す。彼はジュリオに治療は時間の問題と述べ、またわたくしにその旨を説き伏せるように
助言してくれる。

「高名な医師に相談などして、これ以上無駄な出費はしないようにして頂きたい。高熱が出た
と云って驚かないようにしてほしい。縫合箇所^{ほうごう}の化膿^{かのう}の場合はとても時間がかかるので、それが
治療してくれるのを待つだけです。今のところ6箇所ですが、他にも見つかるでしょう。やがて
は、それも自然に治療します…」

もはや科学者^{サイエンティスト}が何と説明しようと、もうまったく信用しないと、そっけない返事をする。わ
たくしは、皮肉屋^{ひにくや}で辛辣^{しんらつ}で意地悪な性格なのだ。彼のことを、わたくしはわざとすげなく扱^{あつか}
う。そのことに彼は気付いて、女のことを罵^{ののし}って云う。

「外来病棟^{がいらいびょうどう}で4年間というもの、毎日40人の女性を診察してきましたが、これだけは申し上
げておきます。夢想というものは儂く消え去ってゆくものです。ますます女というものは並外れ
て出来が悪い生き物だと納得させられるばかりです。」

「どうぞ、ご随意に！ 刀圭家は、子宮^{メカニズム}の機能はご存知のように見受けます。しかし、女性が
抱えている心^{かか}の問題——生理学上最も重要な要因^{ファクター}だと思ひますが——は完全に看過^{かんか}されています。
要するに、わたくしたち女は決して厄介^{やっかい}な生き物^{のし}なのではありません。然るべき説明^{しか}があなたが
たに出来ないだけのことです…」

「確かに。ところで、わたしは何年も働いてきましたが、あなたのような方^{タイプ}にお目にかかるの
は、これが初めてです…」

「そうではないでしょうか？ …お世話になりました！ …こうして、わたくしは病が癒えて退
院するどころか、お蔭^{かげ}さまで、前よりずっと病状が悪化して退院してゆく有様です…」

彼の猛烈な反論（彼は、それが報酬^{ほうしゅう}拒否^{つな}に繋がるので、刀圭家の仲間意識丸出しで反論する）。
わたくしは拿破里^{ナポリ}へと発つ。善良な小天使^{アンジェリン}は、眼にいっぱい涙をためている。ジョヴァンナ
は、両手を拡げて、わたくしを抱擁し、腕にギュッと力を入れる。接吻^{せつぶん}したい様子だったが、決
まりがあるので、それが出来ない。こんなに感じやすい人柄なら、純潔に嫌気が差してくる人生
のある局面^{げんぞく}で還俗^{わんぞく}するべきだと思ったりする。

とても辛い思いをしながら、わたくしはいつも親切に世話を焼いてくれた女友だちとの縁を切
る。若死^{わかしに}して、もう二度と彼女たちに会えないものと思ひ込む。

用心に用心をしての旅。無事拿破里^{ナポリ}に着く。

知り合いたちの熱烈な歓迎を受ける。日々の治療には、かかりつけの医師を呼ぶ。7月の段階

で、外科治療は止めた方が良くと云ってくれた医師である。わたくしに再会すると、どうして自分の意見に従わなかったのかと、やんわりとわたくしをなじる。彼と二人だけになりたく思う。わたくしの病気の正体を知りたいと思う。

「診断書にコッホ桿菌²⁸⁾への言及があります…では、結核²⁹⁾!! …奥さま、これは何かの間違いだと思えます。」

恐るべき病名に、わたくしは心が凍りつくような気分を味わう。

「絶対に、そんなことはありません。間違いです。彼らは意地悪い人々です…おっしゃって下さい…それが間違いだとわたくしは知る必要があるのです。」

「奥さん、わたしは誓って申し上げますが、そうではないでしょう。検査^{テスト}では、あなたは何ら心配されることなくお子様を身近に置くことが出来、早晩に全快されるはずですから。」

ジュリオが部屋に戻ってくる。今ではわたくしの心身の状態が判っているので、そのことを彼にも熟っぽく話す。すると、彼は実に興味深い事柄をわたくしに語ってくれる。診断をめぐって、教授と医師とは意見が食い違っていたと云う。教授は結核など問題にもしていなかったが、病気の原因を突き止めようとする、どうしてよいか分からなかった。医師の方は、逆に卵管内に細菌が認められたとはっきり云い切った…しかし、今では悪い患部はすっかり摘除されたと断言している。

頭脳明晰^{ずのうめいせき}で控えめな主任医師は、ニヤリと皮肉な微笑を浮かべて、第三者の意見を述べた。それが、もっとも正確なものだった。

「感染の原因は、縫合用絹糸の滅菌が不完全だったからです。これだけは、はっきりと断言できます。」

日時が経過したが、発熱のせいで起き上がれない。医師は縫合箇所の完治を促進しようと、やむなく小さな切開をわたくしに勧める。いつもながらの苦痛を思うと、ぞっとする。

晩になって、彼は同僚をひとり連れて戻って来る。二人は、わたくしに上手に麻酔用面蓋^{じょうず}を装着できない。それで、依依兒^{エーテル}³⁰⁾を含んだ綿のガーゼで、入眠させようとする。ところが、睡眠薬³¹⁾が、わたくしには特に効いてくれない。彼らは出てゆく。わたくしの不安な様子に、新しい医師は腹を立てる。(彼は、その時、長期の病気治療に苦しめられ、何ヶ月にもわたる苦痛のストレスで、すっかり変調をきたしてしまっただけで、精神状態を考慮していない。)

ジュリオは、わたくしに許へ彼が戻ってくれるように頼まなければならない。彼は新しい助手を連れてくる。彼らは、大型の麻酔用面蓋^{ますい}をわたくしの顔にかぶせることが出来る。またもや麻酔をかけられる。依依兒^{エーテル}だけだと、吐き気がしない。覚醒は、囁くような麻酔の場合とはまったく違った。わたくしは酩酊状態^{めいてい}だった。打ち震えるような夢見心地だ。良い夢を見る…日向にピンク色の服を着た子供たちが一列に並んでいる…

「お母さん、聞いて…今では、モルフィネ³²⁾中毒や依依兒中毒患者の心境がよく分かるの…覚えていて? …マリーアのこと…ええ、マリーアよ…フィレンツェの〈花旅〉で、モルフィネ注射を打っていたマリーアのこと…素晴らしいわ! その眠りは! …依依兒を、もっと

やって欲しい。もう一度！ …」

笑い、おしゃべりし、冗談を云って、わたくしは医師の両腕をグッと握り締め、蒼ざめた母親とジュリオの顔を見て、わたくしは自分のおぞましい狂態に気付く。

医師は安心させる。

「依依兒麻酔のせいです…何でもありません…すぐに良くなります。」

あらためて小さな手術を受けたが、病状は相変わらずで、回復が促進されもしない。絹糸縫合箇所が、腹立たしいほどジワジワと、云うことを聞かない肉体をさいなむ。包帯交換には、ほぼ2週間毎に誰かに来てもらう。

数ヶ月が経過する。羅馬の教授は、もう一度わたくしを診たいだろう。女医が旅行は可能と書いて寄こす。教授のことではない。彼女は注射のためだと何度も念を押す。注射が必要なのだ。注射を受けなければ、わたくしの病気は治る見込みがない。

今となっては、病気が治らないのは、わたくしのせいだと彼らは云うに違いないと思うし、それに針で縫われる体験の恐怖にもう耐えられないことも確かだ。

医師も俗人たちも異口同音に、「実に奇妙なことに、彼女は大きな犠牲を強いる開腹手術³³⁾を拍子抜けするほどあっさり受け入れたが、今は一本の注射を考えただけで悶え死にしようなのだ」と噂する。

わたくしは肩をすくめてみせる。

「未開人にお似合いの療法ね！」

気分が落ち着いている日に、医師はわたくしに注射することが出来る。これは事件だ。でも、わたくしにはとてもショックだったので、医師はもう注射はしない方がよいと納得したのだった。

わたくしは未来派運動について、時々医師や友人と話をする。わたくしは、以前から手術の体験記を自由気ままに書いてみようと考えている。ある日、セッティメツリがプラートでわたくしにマリネッティを紹介してくれたが、彼は前線から、こうした興味深い印象を綴ってくれるように絶えずせっついてくる。自分の病気のあまりにも暗い考えにとりつかれているわたくしには、未来派文学に専念することは、ひとつの気晴らしであると感じられる。

註および参考文献

本稿の翻訳に使用したイタリア語原文テキストは、Enif Angiolini Robert (1886–1976), *Un ventre di donna: romanzo chirurgico con Filippo Tommaso Marinetti* (Facchi, Milano 1919) で、今回はその第6–7章にあたる第60頁から第113頁までを本邦初訳として試みに日本語に訳してみた。

12) 麻酔用面蓋 — 吸入麻酔法の発達に従って、進歩改良され、1911年～1912年頃に米国とドイツで現在使用されている面蓋の原型ができた。

13) 囁嚅仿謨 chloroform — 常温では無色透明の液体で、甘い匂いが特徴の揮発性全身吸入麻酔薬。正式名称はトリクロロメタン trichloromethane で、化学式は CHCl_3 。リービッヒ Justus Freiherr von Liebig (1803–1873) は、エタノールをさらし粉(次亜塩素酸カルシウム)と反

応させて、1832年に初めて抱水クロラルの合成に成功した。1847年にスコットランドのエジンバラ大学医学部教授 J. Y. シンプソン Simpson によって最初に臨床応用され、1853年および1857年にヴィクトリア女王の無痛分娩のためにジョン・スノウが使用した。空気中で1.5%濃度の混合気体を最小麻酔濃度 (MAC) 0.647% 吸入することで、迅速な導入が得られ、覚醒も迅速で不燃性。臨床は無害とされる微量の一酸化炭素を発生する。心機能と呼吸機能の抑制、血糖上昇、アシドーシスを惹起し、2、3日を経て重篤な小葉中心性肝壊死および腎尿管障害が発生することが報告されている。

- 14) 縫合針 sewing (surgical / suture) needle — 半円弧状の彎曲針とまっすぐな直針の二種類があるが、縫合には、もっぱら彎曲針が使用される。針先断面が三角形の角針は、皮膚や筋膜や腱など強靱な組織用に、針先断面が丸い円針は、消化器や血管や腹膜や皮下組織など柔らかい組織用に、より刃先の円い鈍針は、肝臓や腎臓など脆弱な組織用として使い分けされる。組織の損傷を最小限に防ぐことが出来る血管吻合や胃腸管縫合用の糸付き針 atraumatic needle もある。
- 15) 縫合術 suture (raphe) — 縫合糸は、非吸収性の絹、木綿、合成繊維、銅線 (銀線、ステンレス・スチール線)、ダクロン、ナイロン、テトロン、テフロンと、吸収性の哺乳動物の腸組織から作られる腸線 catgut (クロム加工糸と非加工糸) や最近では吸収性が遅く張力が強いポリグリコール酸 (polyglycolic acid PGA) 線に分類される。縫合法にも1針ごと結紮をくり返す結節縫合、1本の糸で連続して縫う連続縫合、巾着縫合、ジグザグ縫合、U字縫合、Z字縫合などがあるが、重要なのは、創縁を正確に接合し、組織の張力に適した縫合法を選択して、死腔を残さず、局所の循環障害や組織の断裂を生じないようにすることである。Michelの金属クリップ縫合も一般的である。
- 16) 瘢痕 scar / cicatrix — 外科手術などを含む外傷部に、創部の肉芽組織器質化完了段階で毛細血管の退行、遊離細胞消失、線維芽細胞の繊維細胞化、膠原線維の増殖、基質の硝子変成を起こした組織のこと。一般外科医は、皮膚縫合部分の美的仕上がりに無関心である。
- 17) 〈切り裂き魔〉 Jack the Ripper (Jack lo sventatore / squartatore) — ロンドンの貧民街 (イースト・エンド) 地区や〈ホワイトチャペル〉地区で、1888年8月31日から11月9日にかけて5人の売春婦が鋭利な刃物で喉を掻き切られて殺害され、死体が無残に切り裂かれた犯罪史上有名な迷宮入り事件が発生したが、警視庁 (スコットランドヤード) 宛に投函された犯人からと推定される投書郵便物には、〈Jack the Ripper〉とサインされていたことにヒントを得て、エニフ・ロバートは、組板の鯉を捌くかのように手術刃を振り回す執刀外科医に対して、かかる渾名を与えた。(仁賀克雄著『図説切り裂きジャック』2001年 河出書房新社)
- 18) 解剖標本 surgical sample — 手術で摘出 extirpation した病変部位のことで、病理検査などに試料として使われる。
- 19) 卵管 salpinx uterina (Fallopian tube) — 卵巣から排卵される2次卵母細胞 (卵娘細胞) を授受して子宮に送致する長さ約10cmの一对の管状女性内性器。
- 20) 卵巣 ovarium (ovary) — 血管に富む結合組織の間質と全体を包み込む基質層の白膜とからなる一对の女性生殖腺。卵巣間膜内に血管、神経、リンパ管が通り、間質は種々の発育段階の卵胞が存在する長層皮質部と髄質部に分かれる。閉経後は萎縮する。
- 21) 嘔吐防謔性の発熱 — 麻酔薬クロロフォルム chloroform には習慣性があり、2%を越えると呼吸停止や肝臓機能の低下をもたらすなど毒性が強く、発熱の直接原因でなくとも人体に有害な作用を及ぼす。
- 22) 摂子 forceps — 英語では鉗子のことも forceps と呼ぶが、生体組織や医用材料を把持したり圧迫したり牽引したりするための刺抜きピンセット様の多種多様な器具。組織用には先端部に鋭い鉤を有する。
- 23) 沃度丁幾 iodine tincture — ヨードとヨードカリをエタノールで溶解したハロゲン系消毒剤で

細菌・真菌・ウイルスに効力を発揮する。

- 24) 腹膜炎 peritonitis — 腹膜炎の炎症一般のことだが、急性と慢性、汎発性と限局性とは分類され、慢性の場合は結核性腹膜炎が多い。癌由来のものを癌性腹膜炎という。男性腹膜腔は閉鎖空間だが、女性では卵管采・卵管・子宮・膣によって外界と連絡する。
- 25) 腸骨窩 os ilium — 腸骨は骨盤の寛骨のうち、左右上方扇状部を指し、その内側面の腸骨筋が付着するあたりを腸骨窩と称す。
- 26) ドゥランテ式注射 — 不明
- 27) コッホ Robert Koch (1843–1910) — ゲッチンゲン大学卒業 (1866) 後、開業し、普仏戦争に従軍、ウォルシュタイン地方官医として勤務、脾脱疽菌の純粋培養に成功する (1876)。結核菌発見 (1882) に至る細菌研究中、固型培養基、細菌固定法、染色法、顕微鏡写真撮影法などを考案して細菌学の基礎を築く。コレラ調査のためにエジプトおよびインドへ出張。ベルリン大学衛生学教授に任命される。ツベルクリン反応の考案者。〈コッホ伝染病研究所〉所長として、マalaria、アフリカ回帰熱、アフリカ海岸熱、眠り病などの研究に従事。ノーベル医学・生理学賞受賞 (1905)。世界一周旅行の途上に来日 (1908)。
- 28) コッホ桿菌 mycobacterium tuberculosis (tubercle bacillus) — 大量のナイアシン (ニコチン酸) を合成する棍棒・分岐状の好気性マイコバクテリウム属に入る抗酸菌種で、1882年に〈細菌学の父〉コッホが初めて培養に成功したヒト結核病原菌のこと。陽性石炭酸やクロロヘキシジンなどの消毒剤は無効である。
- 29) 結核 tuberculosis — 結核患者の痰の中に含まれる結核菌 mycobacterium tuberculosis を経気道的に吸引することで、肺内に付着・繁殖して発症する肺結核が多いが、全体内臓器で発症する。1944年セルマン・ワックスマンによってストレプトマイシンが発見され、同じ頃スウェーデンのヨルゲン・レーマンによってパラアミノサリチル酸〈パス PAS〉が開発されるまで、産業革命以降、英国で1780年頃には総人口の1%が肺結核で死亡するような恐ろしい不治の病だった。ドイツのシレジア出身の医師ヘルマン・ブレーマーは、1850年代にバルデンブルグ山地ゲルバースドルフに高原結核療養所〈サナトリウム〉を初めて開設した。1946年ドイツのゲルハルト・ドマクによって発見され、バイエル社が開発したイソニアジド、リファンピシン、ストレプトマイシンなど、現在では11種類の抗結核特効薬があり、結核の多くは薬物療法で治癒する。
- 30) 依依兒 diethyl ether; etyl ether $C_2H_5O C_2H_5$ — 臨床使用濃度は3.5~4.5%で、酸素あるいは酸素と笑気を混合して、開放式、閉鎖循環式、半閉鎖循環式回路で使用される。麻酔の導入・覚醒は遅く、気道分泌を増加させるが、呼吸・循環の抑制はない。筋弛緩作用は著明。空気が酸素と混合すると引火・爆発の危険性がある。
- 31) 睡眠 (催眠) 薬 hypnotica, somniferum — 催眠現象を誘発する薬剤のこと。催眠鎮痛薬は、1927年にピック Pick が皮質性と脳幹性の分類を提唱したが、現在では非バルビツール系とバルビツール系とに大別される。後者には従来からヴェロナール (薬理学者フォン・メリングがイタリア旅行中滞在したヴェローナの美に魅せられてヴェロナールと命名した)、バルビタール (命名は、A. フォン・バイエルが1863年バルビツール酸合成に成功した日が聖バルバラの祝日だったから)、ヘキソバルビタール、チオペンタールなどが、前者ではグルテチミド、メタクワロンなどが代表格だが、精神的・肉体的依存性が高い後者はもちろんのこと、前者でも精神的依存性がないわけではない。
- 32) モルフィネ Morphine — 芥子の未熟果に縦に傷をつけ、にじみ出た白い乳液を掻きとって乾燥させると、10%モルフィネ含有の阿片ができる。1803年、セルチュナーが初めて阿片から有効成分モルフィネを分離し、以後、ヨーロッパでは鎮痛・下痢止め・不眠症改善目的の家庭常備薬として、阿片のアルコール浸出液である阿片丁幾が市販されていたが、19世紀後半に皮下注射法が考案されて阿片中毒が社会問題化する。

33) 開腹術 laparotomy (ventrotomy, celiotomy, Bauchschnitt) — 腹膜腔内に至るための腹壁切開法。腹壁組織の解剖学的構造と特質および疾患の特徴に応じた安全な術野の確保と筋肉、血管、神経の損傷を最小限にして、切開創が無理なく正確に閉鎖でき、術後の癒痕を極力目立たせない便法として、線維帯白線 *linea alba* 上に切開を設ける上下正中切開法が標準化されている。

以上の註記作成には、以下の諸文献の関連項目を適宜参照した。

和田攻ほか編『看護大事典 *Igaku-shoin Nursing Dictionary*』医学書院 2003

南山堂『医学大辞典 *MANZANDO'S Medical Dictionary*』MANZANDO Co., Ltd. Tokyo 1985

『最新 医学大辞典 *ISHIYAKU SHUPPAN'S Medical Dictionary*』医歯薬出版株式会社 1990

『ステッドマン医学大辞典 *STEDMAN'S English-Japanese Medical Dictionary*』(株)メジカルビュー Medical View 社 2004

出月康夫責任編集『全科術前・術後マニュアル』照林社 1997

高木仁三郎著『新版 元素の小事典』岩波書店 1999

